

丹波新地域ビジョン骨子案

I はじめにービジョンの役割・性格ー

- ・2050 年を展望した「ビジョン」であるとともに、その実現に向けた道筋、アプローチを示す「シナリオ」
- ・現地域ビジョンの考え方(「成長し続ける丹波の夢ビジョン」)を継承し、地域の風土・伝統に立脚しながらも、時代の変化に柔軟に対応し、新しい革新的な取組を生み出していく『挑戦・成長するビジョン』
- ・『未来志向のビジョン』であることを特徴とする
 - ー挑戦的な目標(ムーンショット)を掲げる「ビジョン」ーそこから遡って(バック・キャストイングして)、近未来(ポストコロナ社会)、現在になすべきことを考える
 - ー可能性の追求: 地域資源、人材、結びつきなど地域の強みを活かし伸ばす、ポジティブ志向の「ビジョン」

II わたしたちの丹波ー風土・文化、ポテンシャル

- ・典型的な多自然地域ながらも、多彩な固有の魅力を持つ地。それが丹波
 - ー共生: 身近な里山での自然とのふれあい、希少種を含む多種多様な生き物
 - ー豊穡: 盆地特有の気候と肥沃な土壌から生まれる特産品の数々
 - ー伝統: 古からの文化・文物が脈々と受け継がれてきた地、日本遺産、創造都市
 - ー交流: 山陰道・京街道の要衝としての歴史、半世紀に及ぶ都市農村交流の歴史
 - ー地勢: 生物が行き交う氷上(水分れ)回廊、篠山層群(恐竜化石)
 - ー気質: 温厚な人々、寛容性に富んだ風土、強い集落の絆(集落共和国たんば)

III 丹波の森づくりのこれまでとこれからー継承と発展ー

1. 丹波の森づくりの理念、成果

<理念の今日的意義>

- ー先導的であった丹波の森づくりの理念は今や普遍的なものに
- ーそれは地域創生の考え方の先駆けであり、SDGs の考え方と軌を一に

<理念の再確認・再解釈>

- 『森』 = まち、集落、田園、森林を含む空間全域
- = 人、生き物全ての営み(丹波の風土・文化、生業、テロワール)
- = 人々の結びつき、ネットワーク

『もりびと』 = 伝統を守りながらも未来社会を切り拓く能動的人材

※『ふるさと丹波のかけがえのない美しい自然はもちろん、暮らしやなりわい、地域内外の人々との交流、生活空間、生活文化など、私たちを取り巻くすべての環境を「丹波の森」と考え、より良い地域づくりに取り組んできました』(当初ビジョン)

※多義的概念としての森: 『森』=空間、営み、結びつき全てを包含、「森」=空間全体、森=森林

<丹波の森宣言の推進状況>

- ー4つの宣言に沿った活動が進展(里山づくり、環境教育、景観形成、文化振興、人材育成等)

<未来へつなぐ森づくりのレガシー>

- ー制度的枠組み(自然・景観保全等に係る条例、広域計画等)、人的資本(担い手)の蓄積、ネットワークの形成、拠点の形成と特色ある活動の展開(丹波の森公苑、シューベルティアードたんば等)、市民精神(活動)の広がり、ふるさと意識の醸成

2. 現行ビジョン(2011~2020年度)の成果検証

<検証方法>

- ー現行ビジョンに示された 5 つの将来像(自立・交流・元気・絆、安全安心)の達成状況について、地域ビジョン指標や策定プロセスで実施したヒアリング、アンケート等から総合的に評価

＜検証結果＞

ー将来像の達成状況については総じて肯定的な評価を得たが、自立では人材育成、元気でま
ちの活力、絆では子育て環境、高齢者の暮らしやすさなど、個々の課題も浮き彫りに

「自立」：地域活動への参加率は高く、多数の人が、住民が主体的に活動する地域と評価している

「交流」：恐竜化石等の地域資源を活かした交流や移住・還流の取組は一定の成果を上げている

「元気」：観光業や農林業の実績は向上。やりがいを感じる人も増えている

「絆」：頼りになる知り合いがいる人、異世代交流をしている人は多く、地域の絆は強い

「安全安心」：犯罪・交通事故が減少。防災意識は向上。医療環境が改善し、健康とを感じる人も増加

3. これからの森づくりに向けて

- ・丹波の森づくり、地域ビジョンが積み重ねてきた取組・成果を活かして新ビジョンを推進
- ・活動の多様化や若い世代の登場で、丹波の森づくりへの認知度が低下傾向に。原点である理念に立ち返り、運動としての森づくりの気運を高めていく必要あり
- ・丹波の森の理念や地域ビジョンの基本理念である『3つの環—自然、人、産業の環*』の考え方は今の時代でも尊重すべき考え方。むしろ、人口制約、環境制約のもと、持続可能な社会への転換が差し迫った課題である今日のほうが、その理念に立ち返って考える必要あり

※『丹波のいのち(=自然)、ひと(=人間)、なりわい(=産業)の3つの環をはぐくむ(「守り」「育て」「活かす」)』(当初ビジョン)

- ・そこで、新ビジョンでは、「丹波の森づくり第2章」を宣言し、新しい時代の到来を告げるとともに、時代の変化に対応した新たな取組を進める気概を示す。また、「つなごう丹波の森づくり」とうたうことで、丹波の森づくりや地域ビジョンの理念を尊重し、次の世代に受け継ぐとともに、その理念がめざす持続可能な循環型社会の実現に向け(環をはぐくみ、つなぐ)取組を推進する姿勢を提示

IV 新ビジョンの基本理念、基本的視点

1. 基本理念

『「人」を創り、「森」を(守り)活かし、「農」をはじめとする生業を興すことで、安心して住み続けられる、自立した活力あふれる‘ふるさと丹波’の創生』をめざします。

その実現に向け、新地域ビジョンでは、次の5つの方向性を提示

【環境、経済、社会(くらし)の好循環】

- ー環境の改善が経済、社会の発展、暮らしの向上をもたらす地域社会をめざします
- ー新しい暮らしの創造によって、環境負荷の低減、経済の活性化を進めます

【農と食を中心とする産業、社会、暮らしの創造】

- ー食を中心に産業の再編、融合を進め、食の拠点化をめざします。
- ー農のある暮らしが楽しめる地域社会であり続けます。

【人と自然(生き物)の共生、人(感性)と技術の調和】

- ー自然との共生を人の力とともに技術の力を活用して進めます
- ー地域に見合った技術を選択し、暮らしやすい地域社会を実現します

【伝統の継承と未来への挑戦】

- ー昔から残る丹波の森、風景や農の営みを未来に引き継ぐ一方で、時代に相応しい新しいくらしのかたちや生業の創造に挑みます

【参画・協働の深化—共感・共進化・共創へ—】

- ー‘共感’を基本に担い手(もりびと)づくりを進めます。居住地、年齢、性別、国籍、障がいの有無等に関係なく、森づくりに共感するだれもが担い手として活躍できる社会をめざします
- ー学習・活動を通じて担い手がともに成長(‘共進化’)し、新しい価値の創造(‘共創’)に取り組めます

2. 基本的視点

・新ビジョンでは、以下の5つの視点を重視して、シナリオを展開

「寛容性」: 全ての人を温かく包み込む、開かれた地 丹波

- ー想いを共有する「関係人口」にも開かれた地域づくり、多文化共生、多世代間交流の地域づくり
- 関係人口拡大、グローバル化、インクルージョン(社会的包摂)

「循環性」: 資源、ものが循環し、社会、経済も回る最適化社会 丹波

- ーエネルギー自給率の向上、地産地消の推進(食糧自給率の向上)、ゼロ・カーボン(脱炭素)社会の推進
- 環境負荷低減、持続可能な経済社会の構築

「可能性」: 多様な機会と選択肢に恵まれた、約束の地 丹波

- ー個性的なライフスタイル、ワークスタイルの発信、デジタル化、働き方改革の推進、起業創業支援
- 移住・環流拡大、起業拡大

「固有性」: ここでしか体感できない丹波ならではの魅力

- ー地域資源の磨き直し、コト体験の機会創出、世界へのオンリーワンの魅力発信
- 集客、販売の拡大

「普遍性」: 世界に伝播する丹波スタイル

- ー暮らしを変える超スマート技術の導入推進、未来社会の暮らしのモデル地区設定、社会実験の推進
- 世界のモデル化: デジタル技術の力を活かした、自然の中での新しい暮らしのかたち(持続可能な自律分散型居住モデル)の創造・発信

V 2050年の丹波を描くー望ましい地域の姿ー

1. 2050年に向けた環境変化

(1) 長期的な人口減少傾向ー人口が減少しても、活力ある地域社会の実現ー

- ー2050年の丹波地域の人口は2020年人口から40%近く減少し、6万人台にまで低下(兵庫県人口推計)。江戸前期(17C)の人口水準に
- ー地域の持続的発展に向けては、人口数の維持よりも**地域活動総量**(現実・仮想空間での人の接触・交流、情報、モノ、カネの流通・循環の促進)の**拡大**を重視すべき
- ー人手をかけずとも持続可能な地域経営のあり方を考える必要あり
- ー人口減少への対応の鍵は、担い手としての**関係人口の拡大**と**Society5.0(超スマート社会)**によるデジタル革新にあり

(2) 環境・資源制約の深刻化ー持続可能性、資源効率性の高い社会経済システムへの転換ー

- ー地球温暖化が深刻化する一方で、今後、世界的に資源の枯渇や食料需給の逼迫が予測されている
- ー地域では、SDGsの理念に沿って、環境負荷をかけない**地域社会(ゼロ・カーボン社会、循環型社会)**の発展方策や暮らしの質(QOL)向上の途を探る必要がある
- ー地域単位で資源・エネルギー面での自立をめざす動きも活発に(**自立・分散型社会の実現**)
- ー地域では、環境・資源リスクへの対応が新たなビジネスや産業の創造を促す、すなわち、環境保全が**経済振興・社会発展につながる(環境、経済、社会の好循環)**仕組みの構築が重要に

(3) 超スマート社会(Society5.0)の到来ー人が身体、空間、時間の制約から解放された社会の実現ー

- ーIoT(Internet of Things)で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有されることで、新たな価値、イノベーションが生み出され、課題の解決が図られる社会に
- ー人口減の地域社会でも、デジタル技術によって必要なモノやサービスを、必要な時に、必要な人に、必要なだけ提供することが可能に。地理的・時間的制約から解放されることで、過疎地も**居住地、就業地としてのポテンシャル**が高まる
- ー人はAIとの棲み分け、ロボットとの協働を図りながら、人間らしさ(自分らしさ)を追求。創造的な活動に向かう。居住地、滞在場所の選択にあたっては、生活の利便性よりもむしろ、各人の**創造的活動を支える場(創造都市・創造農村)**としての可能性が重視されるように

ー地域社会の空間・ストック(森林・田畑・家屋等)管理やエネルギー供給等の最適化が実現

2. 2050年の地域社会ー空間像、社会経済像、人間像ー

⇒将来像をストーリーとして叙述

⇒ストーリーに沿って、数値目標を設定(ゼロ・カーボン、食料・エネルギー自給率100%、健康寿命100歳超等々)

(1) 空間像ー森、川、集落、まちの姿ー『豊かな森(空間)を守り、活かす』

- ・100年前と変わらない、多様な生き物が棲む豊かな森が残る丹波。憩いの場や暮らしの場としての森、里山の利用が拡大
- ・森は生業・生産の場(資源、エネルギー源)として再生。麓の集落では、木質バイオマスによるエネルギー自給率100%を達成
- ・河川では、安全や維持管理に配慮しつつ、自然を生かした整備を進め、水辺には子どもたちが水遊びを楽しめる空間や、生き物が生息しやすい瀬や淵など多様性に富んだ環境を創出
- ・集落(里)では、公有化(共有化)の進展とデジタル管理技術の導入で、家屋、土地やコミュニティのシンボル(神社仏閣、鎮守の森等)の保全が進む一方で、関係人口が集落に日常的に滞在し、地域の担い手として活動。集落のなかには、居住者がいなくなっても、農業生産施設やスポーツ・文化施設、まるごとホテル、ビジネスパークなどとして維持・活用されるところも出現
- ・集落、田畑、里山、水辺が保全され、日本の原風景的な丹波らしい景観がそのまま残り続ける
- ・まちでは歴史的建造物が大切に管理され、趣ある街並み景観がそのまま維持される一方で、まちなかのそこかしこにある古い施設・家屋は改修を経て、ふれあい・交流の場(まちの居場所)や、オフィス、起業・創業拠点、創造的活動空間等へと変身。かつての賑わいを取り戻す
- ・まち対人(有人)サービス機能が集約化され、子育て世帯やシニアが住みやすい生活環境が整備され、まちと集落の二地域居住も進展(まちと周辺集落で1つの自立分散型居住圏を形成)

(2) 社会経済像ー経済システム、産業・雇用構造、社会基盤ー『農の営み、生業を創る』

- ・農(森)を中心とした新たな経済、社会エコシステムの構築
- ・農林業、地域産業、IT産業の融合による新しい経済、産業構造の創出。フードバリューチェーンの形成(食関連産業の集積・連携)による付加価値の高い商品・サービスの開発。食材の供給基地から新たな食ビジネス、食ツーリズム、食文化の創造・発信拠点への転換
- ・デジタル技術を活かした新しいビジネス・サービス(MORTIEC)の創造ー「地産地創」、「地創地産」の実践 ※MORTIEC=森、農、食、コミュニティの分野におけるDX(デジタル・トランスフォーメーション)
- ・地域資源が付加価値の源泉に。地域資源を活用した新しい製品・サービスを生み出す仕組み・組織の形成や人材の発掘・育成が進展
- ・生産・サービス活動、空間管理の現場における無人化、省力化、自動化の達成(無人農業、ロボット介護等)
- ・しごとのスタイルは大きく変容。マルチワーク(兼業・副業)が基本に。各人が多種多様な(有償・無償の)しごとの組み合わせにより自らのライフスタイルを演出
- ・森、集落、まちの至る所にワークスペースが出現。その日の気分次第でどこでもテレワークが可能に
- ・ツーリズムとしごと、ツーリズムと暮らしの境界が曖昧に。日常と非日常が連続する刺激的なライフスタイルが可能に
- ・新しい生業づくり(起業・創業)を地域全体で応援する仕組みの創出
- ・地域情報のビッグデータ化とAIの導入により、防災・防犯をはじめとする情報の精度向上を実現(個々人のニーズに寄り添った情報を配信)
- ・共有経済(シェアリング・エコミー)による新しい循環型経済の成立ー社会ストック、人材の共有化の進展。デジタル通貨が地域の主軸通貨に

(3) 人間像—ライフスタイル、つながり、コミュニティのかたち— 『丹波を愛し、丹波を担う人をはぐくむ』『人と人のつながりを育む』

- ・自然と共生する暮らし、農のある暮らし、食の豊かさを享受できる暮らしがライフスタイルの基本に
- ・年齢、性別、国籍、障害の有無に関係なく、誰もが担い手(もりびと)となって地域社会のなかで自らの役割を見出すことが可能に
- ・デジタル技術を駆使し、地域課題の解決や暮らしに役立つサービスの開発に挑むイノベーターとしての市民(もりびと)輩出
- ・100歳超のシニアがAI、ロボットの助けを借りて現場の第一線で現役として活躍
- ・地域固有の文化を継承し世界に発信するとともに、創造的活動の場として、内外から多種多様な人々を招き入れることで、新しい文化の発信拠点へと発展
- ・空の移動革命が現実—丹波の空を「空飛ぶ車」が飛び交い、いつでも、どこでも行きたいところに行ける時代に(移動のパーソナル化の実現)
- ・自然や生き物とのふれあいや地域文化に接することでふるさと意識が高まるとともに、五感、美意識が研ぎ澄まされていく子どもたち。やがて子どもたちは、感性と知性のバランスのとれた創造力(想像力)豊かな人間へと成長
- ・デジタル技術を活用し、子育て、介護を地域社会全体で支える新たな共助の仕組みを構築
- ・多国籍チームによる地域課題の解決—世界の叡智を丹波に結集
- ・自治会・地域運営組織の仮想化。関係人口を取り込んだ仮想コミュニティが地域自治・経営の基盤に(デジタル・ガバナンスの推進)
- ・丹波を本拠(出自)としつつも、国内外で活躍する人たち。世界の彼方に住んでいても、丹波を愛し、応援してくれる人たち。境界を越え、丹波のサポーター・ネットワークは拡大

VI 将来像実現に向けたシナリオ・方向性

⇒将来像の実現に向けて推進すべき施策パッケージを「シナリオ」として記載

⇒シナリオ毎に、将来像実現に向けた向こう 10 年間の施策展開の方針を示したうえで、「シンボルプロジェクト」をはじめとする 5 年間の取組・事業を提示

1. 空間像シナリオ

<自然環境・景観>

シナリオ1 森・川・里の自然再生・活用

—災害のない豊かな森づくりとして今後進めていく防災林や野生動物共生林、針広混交林等の整備方針を明らかにする。豊かな川づくりに関しても、河川整備計画などに基づき、自然環境の保全に努めながら整備を進める。

—憩いの場、学びの場、暮らしの場としての森の活用を進める「アクティブ・フォレスト」プログラムを策定。住民、関係人口、学校、企業などがパートナーシップにより森(里山)づくりや森林管理、資源循環、希少生物保護、環境学習、もりびと育成等を進める仕組みを創出

シナリオ2 ふるさと景観の保全

—丹波らしい古くて温かい景観を未来に残していくために、時代の変化に合わせた景観ガイドラインの見直しや景観保全に向けた空間管理の仕組み創出、ため池や桜づつみ回廊、たんば三街道等の魅力的な景観の発信に取り組む

<居住環境・インフラ>

シナリオ3 集落保全の仕組み構築

—集落の家屋管理や農地の集約化、里山の保全等を推進する仕組みを整備するとともに、農地が有する多面的機能を支える活動に地域が共同で取り組む。それにより、居住者が減少するなかでも、集落のストックを適切に維持し、将来の多目的利用に備えるとともに、伝統的景観の保全を図る

—局地的な集中豪雨などの発生頻度が増す中で、ため池改修など農業用施設の整備を計画的に進める

- とともに、集落の防災力向上を図るため、管理者による適切な保安全管理など減災対策に取り組む
- 維持・管理にあたっては、定住人口とともに、関係人口が一定の役割を担えるよう集落運営の仕組みの刷新を図る。関係人口が電子市民として参画する**仮想コミュニティ**の構築や新しい**コミュニティ・ルール**の形成などを推進する

シナリオ4 エネルギーの自立分散供給

- エネルギー自給率 100%のコミュニティ形成に向け、小地区単位でのバイオマスを中心とする**再生可能エネルギー**への転換シナリオを描く

シナリオ5 未来都市の創造—スマートたんば構想の推進—

- 中心市街地の将来を展望し、まちなかに集約すべき機能、サービス等の検討を行いながら、人々のふれあい、交流の場としてのその整備のあり方を示す
- 近未来(2025年～2030年)における自動車技術などの進展を念頭に置きながら、公共交通の体系や利用システムのあり方を提示

2. 社会経済像シナリオ

<経済・産業>

シナリオ6 農の持続化とフードバリューチェーンの構築

- 農家の大半を占める兼業・小規模農家と大規模農家が協調しながら持続的に営農できる環境の整備を図るため、経営、環境、人材等の側面から農の持続可能性を追求。経営面では、**スマート農業**による省力化、効率化、人材面では、経営感覚に優れた担い手の育成に加え、**半農半X**等への支援による新たな担い手の確保を推進
- 農林業を中心として川上の企画開発部門、川下の加工・流通、販売、外食、サービス、観光部門をつなぐ**フードバリューチェーン**を域内で構築し、新たな商品・製品の開発にあたることで、**富(所得)**の域内循環と農林業の収益確保を実現。近隣地域とも産物や人の交流を促進

シナリオ7 ツーリズムの新展開

- 社会潮流や個人の嗜好の変化を踏まえ、**‘分散・離散’**、**‘小規模’**、**‘多様性’**を特徴とする**新たなツーリズム**(マイクロ・ツーリズム、テーマ・ツーリズム、着地型観光等と呼称)を地域主体、住民主導で展開し、域内のツーリズムの幅を広げるとともに、将来のインバウンド需要も見据え、その付加価値を高めていく
- 食に関しては、料理だけでなく、ホスピタリティ、景観、物語、雰囲気、しつらいなどから五感で土地の食文化、ライフスタイル、地域性を体感できるような**食文化(ガストロミー)ツーリズム**の展開をめざす
- 時間や場所にとらわれない働き方の普及とともに需要拡大が見込まれるワーケーション等に対応し、**脱観光型、非観光型ツーリズム**(テレワーク+社会体験、ビジネス交流等)の推進を図る
- 丹波ならではのアクティブ・フォレストを生かした、伐採体験や森を使った遊び、スポーツ等を行う**フォレストツーリズム**を推進する

シナリオ8 製品・サービスの高付加価値化—世界市場との直結—

- フードバリューチェーンの形成による農林業やツーリズムとの連携のもと、より付加価値の高い加工食品の開発に挑む。ブランド力のある域外飲食業との連携により、農産物や加工食品の価値向上を図る。オナーワンの農林水産物、加工食品に関しては、**世界市場**への直販に取り組む
- 黒大豆、小豆などの特産品、加工商品、観光地などの地域資源について、更なる市場浸透を図るとともに、**新商品開発**やサービスの多角化など、戦略的な取り組みを通じて丹波地域全体のブランド化に取り組む
- 日本遺産、恐竜化石等丹波固有の地域資源を活かしつつ、地域性、ストーリー性をもった商品・サービスの開発に取り組む

<起業・創業、働き方>

シナリオ9 シリ丹バレー構想の推進

- 起業家ネットワークの形成やテレワーク拠点の整備、投資家・機関とのマッチング支援等、起業しやすい環境(エコシステム)を創出。IT 事業者と地域産業、農林業の融合・マッチングを図り、MORITEC による新商品・新サービス開発を推進
- ITやAIを活用し地域課題の解決に資するビジネス(スマート農業等)や地域資源を活かしたビジネス(恐竜DMO等)の立ち上げを促進

シナリオ10 多様なワークスタイルの創出—しごとのみえる化、柔軟化—

- 若年層等を対象に農林業、地域産業の現場での就業体験機会(有償インターンシップ等)を拡大する一方で、人手不足解消に向け組織間で人材の共有化、相互利用を促進
- シェアリングエコノミーの1つとして、地域限定のクラウド・ソーシングの仕組みを構築し、地域でニーズ・供給のある多種多様な小口のしごとのマッチングを促進し、副業・兼業(半農半X等)の推進を図る

シナリオ11 農のある暮らしの実践

- 農や食、スローフードライフに関心のある層に対して、コト体験プログラムや就業体験等を通して丹波における農のある暮らしの魅力を訴求。多様な就農へのゲートウェイを拡げていく
- 他の仕事に従事しながらも、個々人のニーズに応じて、多様な農のある暮らし(半農半X)できるよう伴走型支援を実施
- 農の多様化とともに、農、食をめぐる異能のカリスマ人材の流入を促し、食材の供給基地から新たな調理法や料理を生み出す食文化(ガストロミー)の発信拠点への転換をめざす

3. 人間像シナリオ

<人材育成・確保>

シナリオ12 もりびとの育成・発掘

- 里山づくりなどの地域活動や地域資源を活かした活性化の取組において次世代の担い手づくりを進める。若い世代の担い手の育成にあたるほか、関係人口のなかからも積極的に担い手を発掘・登用
- デジタル技術の活用による社会課題の解決に向け、広く一般からアイデア、知恵、技術を募るオープン・イノベーションの仕組みを導入し、市民イノベーターの参画を促していく

シナリオ13 ソーシャル・インクルージョンの実現—人材の多様性確保、公正な社会づくり—

- 地域において、年齢、性別、国籍、障がいの有無等に関わりなく、意欲ある人材がその能力や経験を活かして、主体的に活動に参画する仕組みを整備し、地域力(問題解決能力)の向上を実現

<文化・教育力向上>

シナリオ14 創造都市・創造農村の形成—文化力の発信強化—

- まちなかエリア等において古民家等のリノベーションにより文化創造活動の拠点形成を図るとともに、クリエイター相互の交流を促進することで、地域に根ざしつつも、時代に相応しい新たな文化、ライフスタイルを発信
- 集落等において伝統文化、民俗芸能、祭礼の継承を図るとともに、コト体験ツーリズムやインターンシップ等を通じてその価値を内外に広く発信

シナリオ15 グローバル教育の実践—世界との連携—

- 丹波の森大学のオープン化、グローバル化を推進。丹波ならではの講座(森づくり、実践農学、古民家再生等)をオンラインで海外からも受講可能にするとともに、講師陣に海外の専門家、研究者を加え、少子・高齢化等世界共通の地域課題の解決に向けたアクティブ・ラーニングを実践

一地域社会でも外国人コミュニティと連携して、多文化共生講座、国際理解教育プログラムを推進し、相互理解を促進

<子ども支援>

シナリオ 16 キッズ・ファーストプログラムの展開

- 一子どもたちが自然のなかでの生き物とのふれあいや遊びを通して、感性を磨き、生きる力やふるさと意識を育むことのできる場や機会を設ける
- 一子どもたちが地域の歴史文化、環境、農林業、地場産業、伝統芸能などを現場で自ら学ぶことができるよう様々な「こどもコト体験プログラム」を地域全体で開発

<つながりの拡大、コミュニティ形成>

シナリオ 17 関係人口の拡大+移住・環流の促進

- 一担い手(当事者)として集落運営、森づくりに関わる関係人口の拡大に向け、ビジターをゲストからホストへと誘う仕掛けづくりを進める。
- 一関係人口の滞在、二地域居住、移住を促すため、生活に必要なモノ・サービスをシェアできる仕組み(シェアハウス、カーシェア等)を整備するとともに、新たな生業を興す人への起業支援や半農半Xを志向する人へのしごとのマッチングを強化

シナリオ 18 次世代コミュニティの形成

- 一最先端のデジタル技術を活用して、高齢者の介護や子どもの見守りの新たなシステム構築や避難誘導情報のリアルタイムでの発信・共有などを進め、安全安心コミュニティの形成を推進
- 一デマンド型タクシーなどに生活交通マース(MaaS)のシステム導入を促し、高齢者等の移動の円滑化を促進
- 一地域、地区単位で、空間や家屋、車などのモノや人(スキル・サービス)等の資源を共有し、相互利用を図り、生活の質の向上を実現するシェアリングエコノミーの仕組み構築を進める。

VII 推進の体制・枠組(今後検討)

- ・既に丹波では、20年間に各分野で様々な地域団体が設立され、活発に活動。また、大学と地域の連携も進み、関係人口も拡大。
- ・そうした内外の組織や人材をゆるやかにつなぐ形で新地域ビジョンの推進母体(プラットフォーム)を結成。多様な人材、異質な人材を地域に呼び込めるよう、関係人口が活動しやすい環境づくり(場の提供、交流の促進等)を進める
- ・全体の推進母体とともに、各シンボルプロジェクトの推進を図るプロジェクト・チームを産官学民で結成
- ・チーム結成にあたっては、オープン・イノベーションの手法を採り、プロジェクト推進上の課題解決に貢献できる人材を中心に人選
- ・推進母体、チームとも、関係人口の力を取り込めるよう仮想化し、仮想空間上での議論、意思決定により、施策、プロジェクトを効果的、効率的に推進